未来物語

hide

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来物語

【Ｎコード】
Ｎ１５８４Ｚ

【作者名】
ｈｉｄｅ

【あらすじ】
何の根拠もなしに選ばれた中学生１０人。彼らに下された命令は中学校の人間全てを殺すことだった。
そして彼らは、未来へと引きずり込まれていった。

1　ｔｈｅｗｏｒｌｄ（前書き）

グロいシーンやセリフが多いです。苦手な方は控えてください。

1　theworld

ジーニアスは港中学2年の中から10人選び、TheWaorldへの招待状を送った。偶然にも、彼らは全員同じクラスだった。

11月3日5：30

古城絆（ふるきずな）は学校のピロティーにやってきた。当然ながら学校はまだ開いていない。人の気配はないと思っていたが、辺りを見渡すと、波村咲（なみむらさき）が体育座りで、柱に寄りかかっていた。なぜ、こいつがいるんだ。もうちょっと遅く来ればよかったと、後悔する絆。そもそも、この招待状は何なのだろうか。彼女もここにいるということは、招待状を持っているのだろうか。

だが、話す気はないので、咲の反対側に胡坐をかき、他に誰か来るのを待った。しばらくすると、寺和兼史朗（てらわけんしろう）がやってくる。彼ならよっぽどましだ。

「あっ、古城ももしかして、招待状貰った？」

「もちろん」そう言って、お互い招待状を見せ合った。

「他に、誰か来てるのか」

「いや、誰もいないと思う」

今、嘘をついた。大丈夫、ばれやしない。心の中で祈りながら、咲が出てこないことを祈った。しかし、二人の会話に反応して、咲が柱の陰から顔をのぞかせた。兼史朗はこちらを見て笑った。自分も後頭部を手で掻き、ごまかした。なぜ、出てくるだろうか。空気を読んでほしいものだ。絆は咲が隠れている柱のほうを見た。

「古城の視線が、気になります」

兼史朗もいじらないでほしいものだ。あまり仲が良くない二人をいじらないでほしい。おそらく、咲は女子が来たとしたら、絆の愚痴を言いそうだ。これだから女子は怖い。女子もたまには、日溜みたいに殴ったりしてこいって感じ。

噂をすれば、日溜弘(ひだまりひ)美(ろみ)がやってくる。彼女に味方が一人増えた。弘美ならまだ、咲より楽に話せる。
「ああっ、咲ちゃん。いたんだ。よかった」
聞き飽きたような声が鼓膜に鳴り響く。弘美は自分と兼史朗を見て言った。
「あとは、寺和と、古城か」
彼女にとっては、期待はずれだったかもしれないが。咲はこちらから期待はずれなので、言い返したいくらいだった。彼女はまじめなせいか、リーダー意識が強い。だから、男子でも強気でいて、簡単に見下す。時々ずっこける時もあるが。
他に誰か来るだろうか。すると、空一輝(そらかずき)と斧好知(おのよしとも)が二人揃ってやってくる。
「誰？空と・・・ああ、斧好か」咲が言った。
彼女は、少したらしな部分があるため、男子と喋るときは、常に笑顔である。好感度を狙っているのだろうか。絆には、そんなものお見通しである。おそらく、絆はクラス全員の性格、特徴を言えるだろう。
「結構集まってね」一輝は言った。
兼史朗は一輝が苦手なため、反応しなかった。絆は何を言おうか迷ったが、結局話すことが思いつかず、
「二人とも招待状持ってるの？」
絆がそう言うと、彼らは招待状を取り出した。それを確認すると、絆は首を上下に動かして、わかったと言った。
「っていうか。ＴＨＥＷＯＲＬＤって何？」知が言った。
「ゲームでそんなのみたことなくね」絆が指を指しながら話す。
すると、弘美と咲も何かを話し始めた。
「なんか、もう男子の会話じゃない？」
「わかる。ついてけないっていうか」
どうやら、絆の愚痴ではないようだ。絆は安心すると、兼史朗と同

じく、しばらく喋らなかった。そのせいか、沈黙が走った。あくまで、彼女たちのせいではない。一輝はこういう、静かな空気が嫌いだ。知も何か言わないとまずいと責任を感じた。しかし、知が静かな空気の中で喋ると、大たいがしける。

そんな空気を打ち破るように、別々の方向から、沢良宜翔平（さわらぎしょうへい）、内野沙絢（うちのさあや）と倉谷咲良（くらたにさくら）がやってきた。

「おっ、沢良宜じゃん」兼史朗は一輝以外の男子が来て、うれしそうだった。

彼と兼史朗は仲がいい。対照的に、一輝と知は同じくらい仲がいい。翔平と兼史朗はお互い、一輝とはあまり口を利かない仲だった。一方、絆は苦手な人物は咲しかいない。

「あっ、弘美来てたの！速いよ～」

咲良ののんきな声が聞こえる。翔平はあいつも呼ばれてるのか。という顔になった。そこにいた男子全員が、聞かなくても理解できた。

すると、沙絢が咲の耳元で何かを呟く。

「相性悪い人ばかりじゃない？」

「やっぱり。あたしもそう思った」

咲の声だけが聞こえる。絆は無視したいのに、無性に気になった。そんな感情を抑えきれないのが、悔しかった。まあいい。

「地味なこと言うけど、古城だけ喋ってなくない？」

何言ってんだこいつ。と、思うしかなかった。時たま、弘美も腹が立つことを言ってくる時がある。おそらく、咲と喋らせるためだろう。あえて、ここは喋らなかった。

その時、６時集合と招待状に書かれていたのに、１０分遅刻で、篠宮聡美（しのみやさとみ）がやってきた。

「ごめん、遅かったかな」

いつものマイナス思考の声が聞こえた。絆は俯いていたが、見なくても聡美だということはわかった。聡美の遅刻に、弘美は怒る。

「もう、なにやってんの。１０分遅刻！ちゃんと、時間守れ！わけわかんないことでも、いつものように時間にルーズになるな！」

漫画のセリフであらわすと、！マークが何回も続きそうな声で怒鳴った。弘美は聡美の行動に対して、いつも、やたらと厳しい。周囲も聞いているだけで疲れる。それくらい、彼女はまじめであり、元気なのだ。
　男子は、今の説教に軽く引いていた。
「ごめーん」
「それしか言うことないの！」
「もうよせ、うるさい」
絆がようやく３０分ほどの沈黙から抜け出し、口を開いた。弘美は素直に説教をやめた。絆はうるさいのが嫌いである。長話も嫌いである。弘美の説教はその両方を兼ねているから、絆はそれがとても嫌いである。しかし、咲よりか、ましだと思っている。
　招待状に書いてあった、１０人はようやくそろった。
「ねえ、古城。今から何する？」知が言った。
彼は、極度に先が読めなかったり、頭が悪いため、よく絆に質問をする。
「さあ。わかんない。でも、今日俺たちは学校を休むことになるのは確かだ」
「はっ、嘘だろ」
翔平が反応した。彼はやたらと、人の話に入ってくることが多い。絆にはよく注意されるが、いいじゃないかと、気にされないことが多い。
「よく考えろ。わざわざ、こんな早朝に呼び出して、何される。俺の予想だが、今から現実ではありえない、非常識なことが怒る気がする」
「ちょっと、やめてよ。古城のカンって、大たいは当たらない？」
咲良が言った。
「悪かったな」
絆が外したことのある予言は、隕石が落ちる。とか、小学生っぽいものしかない。だから、怖いのだ。

「っていうか、なんで、全員同じクラスなわけ」一輝が言った。
招待状には理由など書いていないし、そもそも、なぜ呼ばれたかも書かれていなかった。気付くのが遅かったか。
その時、全員の体が少しずつ、足元から消えていく。絆の予想は当たった。
「なんだよこれ」
「だから言ったじゃん」
「だからって、俺のせいじゃねえだろ」
絆がキレた時には、彼らはもうピロティーから姿を消した。その光景は誰も見ておらず、時は止まってくれなかった。

1章　ジーニアス・B・レイダム

眼を覚ますと、絆たちは真っ黒な空間にいた。徐々に、皆が眼を覚ましていった。何もない立方体の空間はまさに、非常識の出来事そのものであった。
「ほら、古城が変なこと言うから」沙絢が言った。
「俺が言わなくても、こうなってた」
「まあ、確かにそうかもな」
翔平は起こった出来事に対して、理解が速い。そういう面では、空気が読めなくなる。
今から、なにが起こるのか。すると、目の前に巨大なモニターが現れた。青白い画面から金髪の男性が映る。３０歳はいってないだろう。おそらく、２０代半ば。どうでもいいことを考えていると、金髪の男は口を開いた。
「私は、エクスコーポレーション代表取締役兼社長の、ジーニアス・B・レイダムだ」
彼のゆっくりと喋る口調に、兼史朗は聞き覚えがあった。それからジーニアスは続けた。
「今から、君たちには、学校の生徒、教師を全員、殺してもらう」
殺してもらうと、ジーニアスが言ったのと同時に、女子５人は騒ぎ

始める。そうなっても仕方ないだろう。絆は止めなかった。しかし、一輝は。
「静かにしろ。とりあえず、聞こう」
一瞬で、咲たちは静かになってくれた。静寂を確認し、ジーニアスはさらに続けた。
「まあ、驚くのも無理はない。理由は、たった一つ。これから、君たちをネットゲームの世界へ入ってもらう。君たちの役目はこのネットゲームＴＨＥＷＯＲＬＤのウイルスを駆除すること。しかし、ウイルスだけでなく、人が極端に乱入してくる可能性は、９９．９％だ。君たちには、人を斬る覚悟をここで、学んでほしい」
「ふざけんなよ」
現実に前向きな翔平が珍しくキレた。それもそうかもしれない。彼は、友達を大切にする男だ。
「ちょっと、おかしなこと言うな」一輝もサッカー部部長として、ジーニアスに怒りを示す。しかし、ジーニアスはこうなることも予想済みだった。
「ふふっ、予想通りの答えだ」
不敵な笑いが一輝と翔平の心を揺さぶる。言葉も返せなくなり、二人は遂に、黙り込んだ。女子は当然、人殺しをするなどという、行為を命令され、怯えていることしかできなかった。
　しかし、兼史朗がジーニアスにとって、予想外の言葉を云い放った。
「なんで、僕たちにしたんですか」
「おや、興味深い人間もいるものだ」
「なんで、そんなことを」絆は言った。
兼史朗はこちらを見ずに、ジーニアスの方向を見ていた。ジーニアスは、鼻で笑うと、髪をかきあげて言った。
「それは、君たちが。人を殺せるからだ」
意味がわからなかった。赤ん坊だって、どんなに非力な人だって、武器を持って、脳天でも殴れば、人を殺したことになるんではない

か。彼は兼史朗に人間という単位を使った。人ではなく、人間。そもそも、エクスコーポレーションという、会社名自体聞いたことがない。彼は、いったい何者なのだろうか。
　絆はジーニアスを強く睨みつけた。
「おいおい、そんなに怒らないでくれたまえ。古城絆君」
「なぜ、名前を知ってる」
「手紙を送った人物の名前くらいわかってるさ」
そういえば、招待状の存在を忘れていた。確かに、差出人は英文表記で筆記体だったが、おそらく、彼の名前が書かれていただろう。気付かなかった自分に腹が立った。
「今から、君たちに、殺人用の武器を配る。それで、存分に殺してくれたまえ」
ジーニアスは、殺しれてくれたまえの部分だけ、強く言った。翔平は相手が映像なので、殴れず、悔しがった。手をグーにして、強く握った。
「そもそも、ＴＨＥＷＯＲＬＤって何？」
女性陣から唯一、精神が強い弘美が発言した。おそらく、ジーニアスはこの発言も予想通りだったであろう。
「無論、私は現代人ではない。・・・未来人だ。そして、エクスコーポレーションという会社も未来にある。ＴＨＥＷＯＲＬＤはそのエクスコーポレーションの商品だ。そして、そこでとんでもないバグが見つかった。今の私たちでは修復できない。だから、君たちに頼んでいる」
残酷なことを言っているのに、平常で心を保てているのが不思議だった。彼には落ち着きがありすぎる。それが逆に怖い。あえて、感情がない。という見方もできるが、それはありえないだろう。未来人が現れたりなど、非常識の出来事に、聡美や咲はビビっていた。
「何、今更ビビってんの。古城が変なこと言ったら、大たいは覚悟しとけって、言ったじゃん」
初めて聞いた。とゆうより、この出来事はほとんど自分のせいなの

だろうか。カンが当たるだけで、疫病神って言われたこともあったっけ。今まさに、そのあだ名が似合う状況だった。
「では、武器を配ろう」
　１０人の手元が光りだした。そして、一瞬のうちに光は消え、手には武器が握られていた。絆のトンファはスピードが勝負の速攻的な武器なのに、やけに重かった。よく見ると、人差し指は、銃の引き金のような部分に当たっていた。このトンファは、本来の使い道の他に、銃としての機能があるのではないか。
「武器はいきわたったかな？それでは」
すると、彼らは謎の光に包まれて、瞬間移動をした。
　飛ばされたのは、彼らの教室。２－１。周囲は驚きを隠せなかった。欠席かと思われていた１０人が、瞬間移動してやってきたのだ。まずは、担任のほうにトンファを向けた。
「古城・・・何やってるんだ。他のお前たちも・・・」声がもうびくびくしていた。
仕方ないであろう。絆は決意を固めた。そして、引き金を引いた。銃弾は一瞬のうちに、担任の頭を貫いた。
　同時に、２－１の１０人を除いての生徒が叫びだしたり、教室から出ようとした。しかし、ドアはびくともせず、開かなかった。その隙に、一輝が碇のついた槍で、周囲をなぎ払っていく。知も、持っている2丁のマグナムで、生徒たちを打ち始めた。
「ちょっと、待って。なんで、みんな平気で殺せるの？」
平和主義な咲らしい意見だった。しかし、翔平は
「結局、やらなきゃいけないんだ。どうせなら早く終わらせたい」
「仕方ないの。咲ちゃん、仕方ないの・・・」
「日溜まり・・・」
咲以外の９人は、２－１の皆殺しに成功した。すると、ジーニアスの声が聞こえる。
「次は、壁をぶち破って、２－２に行くんだ。その際、天の川弘明（あまのがわひろあき）と高原風香（たかはらふうか）だけは、捕獲するんだ」

「了解」絆だけがそのセリフを言えた。
絆はトリガーを引きっぱなしにして、チャージを開始。一瞬、青白い光を放ち、壁に向かってトリガーを放した。すると、銃口から飛び出たのは、アルファベットのＪを模した光の紋章が壁に刻まれた。そこに、絆は飛び蹴りを放つ。
「ジャッジメントスマッシュ」
呟きと共に、壁が粉々に砕かれ、２－２があらわになった。壁が壊れた衝撃で、そこの教師は死亡。あっけなく、２－２も彼らの手によって全滅した。しかし、任務通り、天の川弘明と高原風香だけは生かした。そして、二人を部屋の隅に追い詰める。
「おい、古城。どうしちまったんだよ」
「悪いな」
兼史朗は二人の後ろに回り込んで、みねうちを首に繰り出した。見事に、二人は倒れた。そのとき、一台のヘリがカッターで窓を粉砕した。操縦士は知だった。
「寺～。その二人乗せて」
「ＯＫ」
兼史朗たちが二人を運んでいるうちに、絆が先ほどと、同じことを繰り返していった。港中学は、崩壊した。
　ミッションが終了したのち、ジーニアスの命により、知の操縦するヘリに9人は乗り、ジーニアスの作りだした光の渦に入って行った。そこを潜り抜けると、ヘリポートが屋上に設置してあるビルへと、着陸していった。全員がヘリから降りると、またジーニアスの声が聞こえる。
「よくやった。思ったより、やるじゃないか。このビルはホテルになっている。もちろん、ここはもう、ＴＨＥＷＯＲＬＤだ。好きな部屋に入ってくれ。階は３７階だ。では、いい夜を」
声が聞こえなくなると、知が寄ってくる。
「知よくヘリの操縦なんか出来たな」
「まあね。あのジーニアスとかいう人の説明聞きながらやってたら、

意外と楽だった」
そんな話をしていると、咲が。膝が震えていた。
「ねえ、みんなおかしいよ。なんで、平気で殺せるの？絶対おかしいよ」
咲はもう泣いていた。声でそれがわかる。場は一度静まったが、皆が咲をわからせようと口を開いた。
「波村もしつこいな」
「何回言ったらわかるんだ」
「お前、あの時何もしなかっただろ」
「咲希ちゃんしつこい」
「やっぱ、やらなきゃいけなかったと思う」
咲は味方を失った。自分と意見の違う人間。いや、もう違う生き物。そう考えるしかないのか。胸に手を当て、何かを言おうとした。しかし、悲しみのあまり、声が出ない。
　そんな咲に追い打ちをかけるかの様に、絆が言った。
「お前の武器。フルートだったよな。お前・・・フルート吹けなかっただけだろ。殺したくないんじゃなくて、殺せなかった。だろ」
精神を傷つけすぎた言葉に一同は騒然とした。咲は絆のところまで走り、胸ぐらをつかんだ。そして、彼の頬を平手打ち。絆の顔の向きが戻ると、地面にたたきつけた。
「ねえ、人の命なんだと思ってるの。ふざけないでよ。あたしは、こんな世界ごめんだから」
そして、咲はビルの端へと、走っていく。9人には、何をするかわかった。こんなところで、早くも一名脱落か。そう思った時だった。跳び下りようとした咲の手を聡美が掴んだ。
「えっ。・・・さとみん。離して。お願い」
咲の頬を涙が伝う。男性陣は黙ってい見ているしかなかった。それでも、聡美は咲の手を離さなかった。
「咲ちゃんには、・・・まだ死んでほしくないから」
咲の手の力が抜ける。そこを聡美は引っ張り、咲は地面に膝をつい

た。二人とも、息が荒い。
「まあ、聡美にしてはいいことしたかな」
弘美が後ろでは一人、拍手する。
　この光景を絆はどう思ったのだろうか。それは、誰にもわからない。ホテルの中には、絆が気が重いせいか、真っ先に入って行った。兼史朗や一輝が微笑する。弘美たちもその微笑に理解が出来た。絆も咲も半分ずつ悪い。彼らはそう判断した。仲間って、いいね。咲は自分の自殺しようとしていた心に問いかける。
　絆は夜、眠れずにホールに顔を出した。そこには、ソファーにもたれかかった翔平がいた。気付かれずに近づいたつもりだったが、すぐに笑われてばれる。
「何。お前もか」
「まあな」
「今、思えば。お前、言いすぎ」
「何がだよ」絆はちらっと、翔平のほうを見る。
「波村に。お前、ほんとっ、女子にも容赦ないよな。だから、嫌われるんじゃない」
「どうでもよくね。女子とか、いらねー。・・・お前とこうして、二人で喋るのも久しぶりだな」
「ああ。そうだな」
　その時だった。風香がやってきた。二人は彼女の存在をすっかり忘れていた。風香はドリンクバーでコーヒーを紙コップに注いだ。
「そういえば、捕獲。したんだっけ」翔平が耳元で囁いた。
「俺も」
「というわけで、帰る」翔平は裏切るかのように、ホールを去っていった。
思わず手が伸びて、あっ、と言ってしまった。しかし、届かずに翔平は全速力でその場を去った。その間に風香はソファーに腰をかける。絆もその場を去ろうとした。しかし、そう甘くなかった。
「ねえ、ちょっと待ってよ。・・・話、聞きたいんだけど。いいか

な」
仕方なく、ソファーに戻る絆。紙コップを眼の前のテーブルに置くと、彼女は話し始める。
「ここどこ？」
「・・・そう言われても。信じてもらえるかどうか。・・・未来のネットゲームの中」
風香は何を言ってるんだという顔になる。それもそうだ。彼女と弘明だけが話を聞いておらず、拉致されたようなものだ。
「まあ、そうだろうな」
「・・・ごめん。ちゃんと、現実受け止めるから」
返事にしては、日本語がなってない気もした。しかし、この状況では話し続けるべきだろう。彼女にとって。自分にとって。それから、絆は風香に今までの経緯を、女性に対して慣れてない話し方で話した。
「そう、なんだ。大変だったね。もしかして、あたしも人を殺さなきゃいけないのかな」
「多分、そうなると思う」
確信はないが、言っておかなければ彼女も心配するであろう。そもそも、なぜ彼女と弘明が選ばれたのだろうか。ジーニアスの考えがわからない。あの男はなぜ、自分たちを選んだのか。考え込んだまま、何も喋らず、ボーっとしていた。
　風香が目の前で手を振る。しかし、絆は全く反応しない。よほど、考え込んでいるのだろうか。気になった。
　気がつけば、風香はホールを去っており、自分ひとりになっていた。辺りを見渡すと、誰もいないのに気付いた。思わずあくびが出る。時計を見ると、もう０時だった。さて、寝るか。久しぶりの夜更かしも悪くはない。絆はゆっくりと自分の部屋へと戻って行った。

　その頃、地下回廊ＢＸ０１では。

「おい、ちょっと待てって。歩くの速いんだけど」
「あたしは、あんたより脚長いから。仕方ないの」
逃げ出した二人は少しは楽に喋れるようになっていた。

2章　初陣の弘明

6時ごろにアラームがなる。自分がセットしたわけではないのに、止めもせず跳び起きた。周りを見ると、見ず知らずの光景が広がっている。ホテルだということはわかる。しかし、あの時食らった首への強い衝撃からは何も覚えていない。ここは、どこなのだろうか。訳もわからぬまま、弘明は部屋を出て行った。
ちょうど、向こう側の部屋から、沙絢が出てくる。
「あっ、内野」
思い切って、彼女を呼び止めた。しかし、沙絢は振り向きもせずに、そのまま廊下を進んでいき、やがて見えなくなった。1年の時は、普通に話してくれたのに。慣れない空間に腹が立つ弘明。自分は完璧なはずなのに。一体、ここは、そして何が起こっているのか。
ここのホテルは思ったより、広いようだ。やがて、ホールに辿りついた。そこには、絆一人がねっ転がっているだけだった。一人でも味方を増やそうと、学校では中の良かった絆に話しかける。しかし、あの時の言葉が不意に頭をよぎる。「悪いな」そのあと、自分は後頭部にみねうちを食らったのだ。少し信じられなかったが。
「なあ、古城」
すると、沙絢と違って振りむきはしてくれた。
「ここは、どこだ。教えてくれないか」
「昨日、高原にも話したよ。めんどくさい。あいつから話を聞いてくれ」
いつになく、冷たい態度だったが、まだましだった。風香を探すことにしよう。
少し歩いて、エレベーターを見つける。風香はどこにいるだろう。31階は図書室と、スイッチの横に書いてあった。彼女は本など読

む人間ではないが、適当に行ってみることにする。
　着いた時には、ドアが開くと同時に咲とすれ違う。咲も弘明から少し避けてエレベーターに入って行った。やはり、自分に味方はいないのか。学校とは、違う友達を作るのに、こんなにも時間がかかるとは。思った以上に、自分は高飛車で、上から目線の立ち位置に立ちすぎたかもしれない。
　その時だった。ジーニアスからの放送が入る。そもそも、彼はどこにいるのだろうか。しかし、弘明は放送の声の主がわからなかった。それもそうだ。
「諸君、よく眠れただろうか。・・・返事はなしか。まあいい。朝食を１８階に用意した。１８階はレストランとなっている。以上だ」
結局、声の主が誰かわからぬまま弘明はエレベーターの方角に戻って行った。速く、風香に合わなければ。
　レストランに着いた時には、１０人＋αがもういた。席は１００席近くあり、みんなバラバラで座っていた。絆は知と一輝と食事していた。風香はどこだろう。奥のほうで、一人でいるのを見つける。そして、風香のほうへと、走って行った。
「風香」
「あっ、なんだ、弘明か。どうしたの。速く食べないと、冷めるよ」
「・・・ああ」
どうも、いつもと違う風香に少しとまどった。とりあえず、パン類を選んで持ってくる。それから、席に座って話しかけた。
「ここどこだよ」
「未来」と、一言だけ言った。
そう言われても、自分は何も聞いていないため、そんな一言でわかるはずがない。しばらく黙り込むと、風香のほうから口を開いた。
「古城から聞けばいいのに」
「俺はあいつからお前に聞けって言われてんだよ」
「ああ、そうなんだ」
いつもより軽い風香には、違和感しか感じなかった。まさか、絆に

何か言われたんじゃ。いや、そんなはずはない。絆は女子とはあまり喋らないはずだった。
「今日なんかおかしいぞ」
「ちょっと眠くて、疲れてんの」
そう言えば、彼女は昨日絆とホールで話していたため、夜更かしをしたのであった。といっても、彼女のほうが先に帰ったが。
「ああ、そう」
なんだか、頼みの綱も役に立たないようだ。まあいい。自分で突きとめていくしかないか。
弘明は朝食を食べ終わってから図書室にいた。エクスコーポレーションやジーニアスについて調べるためだ。まあ、彼や会社の名前は知らないが。
本棚には、やはり風香の言った通り知らない本＝未来の本がたくさん置かれていた。そして、どの本にも、ジーニアスやエクスコーポレーションについては書かれていなかった。悔しくて、思わずため息をついた。誰も味方してくれないのか。本も人も全てが敵なのか。自分は生きている意味があるのか。しかし、死ぬのは怖い。そう考えているうちに、またため息をつくしかなかった。
天井を見上げると、スピーカーがあった。いきなりそこから、放送が入る。どうせ、ジーニアスだ。
「諸君。初任務だ。１階、玄関まで集合してくれたまえ。なお、高原風香。天の川弘明も同行すること。武器を与える」
タイミングが良かった。これで、放送の声の主が誰かわかる。弘明はエレベーターに急いで走り出した。

玄関では１０人＋２人が集まった。
「初めまして。高原風香さん。天の川弘明君。私はジーニアス・Ｂ・レイダムだ。・・・質問はないな。それでは、今回の任務の説明に移る。今回のエリアはＦ１４５だ。このエリアは森のエリアだ。そのまんまだが、昆虫型や鳥型のモンスター。まあ、ここではウイル

スだな。が、多く登場する。炎属性の攻撃をすればいいだろう。ボスエリアに、大型のウイルスが存在する可能性がある。気をつけてくれ」
「質問」
咲良が手を上げて言った。一同はどんなことを言うのか気になった。
「炎属性？の攻撃は誰が持ってるんですか」
「それは・・・天の川弘明君と高原風香さんだ。二人しかいない」
その言葉を聞くと同時に、周りが静かになる。そして、弘明と風香は１０人に睨まれた。一人を除いて。やはり、味方は風香しかいないのか。なぜ、こんな目に会うのか。任務で、死ねたらいいな。弘明は睨みつけられた視線をゆっくりと首を傾け、そらした。
　そして、ガラス張りの自動ドアの前にヘリが到着する。１２人はそれに乗り込んでいった。そして、ヘリが浮上し始めると同時に、１２人の手元に武器が現れる。弘明の手には、槍と斧が合体したハルベルトが握られていた。これで、人を殺せって言うのか。その槍は、まるで１０人の武器と同じ存在なのだろうか。

　彼女は、地下の回廊から抜け出すとともに、上空にヘリが飛んでいるのを目撃した。そのあとに、彼も這い上がってきた。
「何見てんだよ」
「あれ」
指を指した方向には、ヘリが上空を飛んでいた。ふと、頭をよぎる。あそこには、誰が乗っているか。それはおそらく、彼らしかいないだろう。あの日、みんなを殺したあいつらが。

　ヘリがエリアＦ１４５にたどり着く。ヘリポートに着陸すると同時に、彼らは跳び下りる。その時、聡美だけどんくさく跳び下りた。そして、こける。
「いた」
「だっせー」

弘美や翔平に笑われる。
「うるさいな」
道を進んでいくと、二手に分かれた道が現れる。９人はため息をつく。咲は絆が弘明・風香に対して、ため息をつかず、ボーっとしているのを見た。意外と優しいところあるんだ。少し、見直した。口元がしたる。
弘明は責任を感じる。なんで、自分が炎属性の攻撃が出来るのか。拷問に近い。眼が悲しい目になってくる。そんなことしても、彼らは気にしないであろう。風香と自分。どっちに着くのか。今は、そんなことどうでもいいから、こんな状況を抜け出したかった。
そこに、絆が話を切り出す。
「仕方ない。弘明と高原を主に二手に分かれよう。もちろん、男女平等な」
その言葉を言ったって、みんなはそれぞれに動くだけで、考えは変わらなかった。絆以外。絆は弘明の精神が傷ついているのを悟り、わざと弘明側に着く。そして、絆を始め、１０人は風香組と弘明組に散らばって行った。
弘明の班には、絆、知、弘美、咲良、沙絢がいた。絆がいたから少しは安心した。そして、彼らは二手に分かれ、移動を始めた。弘明はこのパーティーで大丈夫か心配した。何といっても、女子がなんとなく嫌だった。ため息をつきながら、重要な役目なせいか先頭を歩いていた。今の自分には荷が重い。せめて、絆が前に出てくれることを祈っていたがどうやら叶わないらしい。願いとははかないものだ。
弘明たちは木が全くない広場のような場所にたどり着いた。絆はこの場所を怪しく感じる。辺りを見回していると、いきなり足場が動き出した。そして、広場一帯は地下へと、落ちていった。
着いたのは、闘技場のような場所だった。もちろん、足場は木のない先ほどの広場の地面である。何が起きるのだろうか。弘明はいきなり出番が来たと感じて焦った。全員武器を構える。すると、兵

隊が１０人くらいぞろぞろと、奥のゲートから出てくる。まさか、
「ってか、人じゃんか。虫じゃねえじゃん」絆がジーニアスを呼び出すような声で叫ぶ。
すると、数秒後にジーニアスの声が聞こえる。どこから放送しているか気になったが、今はそれどころじゃない。
「・・・済まない。そのコロシアムはバグではないが、兵隊はバグだ。本当は昆虫類のモンスターを出すはずだったのだが。まあ、君たちなら出来るだろう。頼んだよ」
それから、ジーニアスの声は全く聞こえなくなった。あっけなく、放送を切り自分たちに任せたのが気に食わなかった。
「また、人を殺すの？」弘美が言った。
この前の時は、あまり気にしてないように見えたが、実際には違ったようだ。咲良や沙絢も少し躊躇って攻撃を仕掛けている。沙絢の矢が一人の兵隊に突き刺さる。彼女の表情は少し申し訳なさそうだった。
絆はその頃、トンファの銃だけで応戦していた。このトンファ、本来の役目として機能してない。どうやって回すんだ。すると、グリップ上部にボタンがあるのに気付く。それを押すと、棒の部分が１８０度回転する。なるほど。心の中で納得しながら本来の動きで相手を仕留めていく。
敵は倒すたびに出てくる。何体倒せばいいのだろうか。もう、３０体は倒したはずだ。敵の中には、少し昆虫類のモンスターも交じっていた。おそらく、これが正常に機能した時の姿であろう。弘明は、効果抜群の炎属性の攻撃を纏った槍を繰り出し、攻撃していた。その姿を絆が鼻で笑う。彼がライバルに見える。
６人に疲れの様子は見えたが、徐々に出てくる敵の数は減っていた。もうそろそろクリアに近い。そして、最後の一人を倒した時だった。巨大な蜂のモンスターが出現する。おそらく、こいつを倒せばここを抜け出せる。しかし、この蜂は中ボスぐらいのレベルだ。絆はよくＲＰＧやアクションのジャンルのゲームをするため、大た

い予想ができた。皆の息が荒く、疲れが伝わってきた。
「めんどくさい、一著やるか」
絆はトリガーを引きっぱなしにして、蜂に向けて放った。とたんに、Ｊの紋章が蜂を捕獲する。そして、そこに跳び蹴りを放つ。
「ジャッジメントスマッシュ」
巨大な蜂のモンスターは、一撃で葬り去られた。残りの５人の口が少しの間、開いたままになる。
　その時、地盤が上昇し始める。やっと、ここから空を見上げることが出来る。自分たちは広場に戻ってこれた。６人は疲れ切っていたが、歩くことはできた。そして、また任務終了地点まで、歩き出した。

３章　似たもの同士

　その頃、風香たちは。二手に分かれてから、咲のフルートの音が鳴り響く。
「うるさいな」
「ちょっとでいいから、ボリューム小さくならない？」
咲は少し、言葉攻めにあっていた。
「ごめん」
咲は申し訳なさそうな顔をして俯いた。風香は、それを見て自分と少し似ているなと思う。しかし、自分のような避けられている人間と一緒にしてはいけないかと、考えを改める。怒られてから咲は、ずっと自分のフルートを眺めていた。自分には何が出来るか。そう考えていると、風香は一輝や翔平たちに砂をかけられる。地面を蹴り、また少しの量の砂が風香にかかる。
「ほどほどにしとけよ」
横から兼史朗が、言った。しかし、二人は小声でわかったよ、と言ってかけ続ける。ようやく、風香が気付いたのか、振りかえる。
「何。やめてよ」
　風香の怒っている思いは大して伝わらなかった。咲はそんな風香

を自分と似ているな、と思う。しかし、いじめ?を受けている彼女に対して、少し度がすぎた失礼かもしれない。そのまま、咲は心の中で風香を見捨てるしかなかった。

そして、着いたのは今にも落ちそうな吊り橋。彼らは息をのむ。それほど、恐ろしく感じた。しばらく、沈黙が走る。そして、翔平が黙って一番に乗り出した。つり橋の木の板に踏み出した。それと同時に、背後から巨大な丸い岩が転がってくる。

「なんだよあれ」

「沢良宜のせいじゃんか」

兼史朗が焦って、後に続く。聡美も急いでつり橋をかけだした。

「待ってよ、さとみん」後に咲希も続こうとした。が、先に一輝が身を乗り出し、猛ダッシュで駆け抜けていった。

翔平、兼史朗、聡美の順でゴールし、今一輝が走ってくる。兼史朗に手を貸してもらい、一輝が向こう側にたどり着く。　咲も今、聡美の手を借りてたどり着いた。しかし、風香が向こう側にあと少しの処で、つり橋が崩れる。風香の体は下に落ちていこうとした。そこを咲が風香の手を掴んだ。

「風ちゃん」

「・・・咲希ちゃん」

力のない咲にあまり、負担をかけるわけにはいかないので風香は武器の関節剣を取り出し、咲たちの足元の地面に、剣先を勢いよくひっかけ、凄いスピードで上昇していった。関節剣の節が完全に縮まり、風香の身体が着地する。

「死ねばよかったのに」一輝がそう呟いた。

咲はその言葉を聞き、一輝の頬を思いっきり、平手打ちした。勢い余って、一輝はぶっ倒れる。

「誤って。・・・風ちゃんに、誤ってよ!」

珍しく、彼女が張り裂けそうな叫び声をあげた。そして、咲の頬を涙が伝う。二度目の涙に、一同は驚かなかった。風香は初めて見たため、その姿が心にぐさりと来た。なんだか、しみじみと来た。自

分のために尽くしてくれている人はここに来て以来、初めてだった。
「もういいよ。咲希ちゃん」
咲の息は、興奮したせいか荒く、汗も出ていた。
結局、風香組はあの後、だれ一人一言もしゃべらず、安全に弘明組と合流した。やってきた彼女たちは、やたらと静かだったので、何があったのだと思う。風香の顔が深刻な表情だったので、弘明や絆はあまり触れないようにした。
「合流したことだし、先へ進まない？」
リーダー意識で弘美が提案した。当たり前のことを言ってどうする。皆が返答しなかった。
「がーん」
「当たり前のこと言ってるだけじゃん」
咲良が横から突っ込む。
「ほら、こんな暗い空気、あたし嫌いだから。ほらほら」
風香と咲の背中を押して、彼らは先に進んでいった。
このエリアは序盤のダンジョンなのだろうか。そのせいで短く感じた。もうすぐ巨大なゲートが見える。そこをくぐると、ビーっと警告音が鳴った。かすかにＷＡＲＮＩＮＧと聞こえる。おそらくボス。
そして、現れたのはカマキリ型の巨大モンスターが現れた。胸部には、人らしきものが埋め込まれている。よくある一体化という奴だ。
「あれ、バグなのか？」
「そうは見えないな」
翔平や兼史朗が言った。彼らは少し眼が悪かったか。
「よく見ろ、胸の部分に人がいる。あれこそ、バグってやつだ」
絆が言った。
「古城、くわしいね」咲良が言った。
「ゲーマーなんでね！」
絆はトンファをカマキリの右足にぶつける。それに続いて、一輝や

弘明、風香も武器を出し、戦闘態勢に入る。全員がまずは足を攻めていった。すると、巨大カマキリは羽をはばたかせ、宙に舞った。
「なんだあいつ。飛べるのか」
「ひっけー」
飛び道具係が少ないため、すぐに応戦出来ない。
「内野！」
「あんな速いの狙えない」
「知は」
「ちょっと待ってくれよ。弾のリロードに・・・」
思わず、絆は舌打ちをする。たまたま、風香のほうを見た。その時、カマキリは滑空攻撃を繰り出してくる。全員は何とか避けたが、相手の動きが速くギリギリで避けていた。次に、鎌で衝撃波を飛ばしてくる。それが風香に当たりそうだった。絆は全速力で走り出し、風香を抱きかかえ回避した。
　彼女は思わず、えっと声に出してしまった。
「高原、俺があいつを捕捉するから。お前、弘明とファイアぶつけてこいよ」
風香は頭の中で、絆の考えを整理してから、ファイアと呟く。そして、すぐにわかった、と言った。風香が弘明のほうへ走り出す。
　そのあとに、絆はＪの紋章を打ち出し、「ジャッジメントスマッシュ」を放った。その呟きに、弘美は
「古城って、意外と目立ちたがり？」
そして、自分も何か出来ると思い、三節棍をブーメランのように投げる。遠心力を増して、攻撃力が上がった三節棍は、カマキリの足を2本部位破壊して、弧を描き弘美の手元に戻ってくる。
　続くように、絆が跳び蹴りでカマキリの片腕を吹き飛ばす。着地すると同時に、絆は弘美に言った。
「日溜も技、持ってんだ。・・・さっき三節棍光ってたけど」
武器が弘美の感情に呼応したところを絆は見ていた。
「えっ、マジ。なんかやる気出てきた！」

一方、一輝や知は
「あいつらグロい倒し方するな」
神がかりな技を繰り出す彼らを少し羨ましく思っていた。
まあ、やはり、咲と違い弘美は話しやすい。絆がカマキリの腕を破壊し、もがいているところを、弘明が炎を纏った槍で相手の胸部を貫く。続いて、風香の炎属性の鞭が四方八方から飛んでくる。その効果抜群の攻撃を大量に受けて、カマキリ体が少しずつ消えていき、昇天した。それを見た弘明が膝をついた。
「やっと、終わった」
声はもう疲れ切っていた。空を見上げると、もう迎えのヘリが来ていた。着陸したヘリに次々と乗り込んでいく。しかし、弘明は肉体的にも、精神的にも疲労していた。まだ乗っていないのは弘明と絆。絆は彼に早く来い、などと言うつもりはなかった。逆に彼のそばまで行き、肩を担いだ。
「ほら、もう帰れるぞ」
思いがけない行動に、弘明は驚いた。そして、絆を見つめたまま、ヘリに乗った。

4章　死ぬのって怖い

地下から彼女は這い上がって、絆たちのいるホテルを探していた。場所も分からず、おそらくまだまだ遠くにあるのだろう。小さな夢でもはかないものだ。すると、後ろから彼の声が聞こえる。また、歩くのが速いのだろう。今回は待ってあげることにした。

咲は47階、防音室で一人フルートを吹いていた。この前の任務の時も、何もできなかった。音は出るようになったが、この楽器でどう戦えばいいのかわからなかった。このままいけば、下手すれば死んでしまう。それ以前に、また絆に何か文句でも言われるに違いない。すると、ドアが開き風香が入ってくる。
「風ちゃん。どうしたの」

彼女は手に一冊の本を持っていた。
「この前は、ありがとう。あのさ、よかったらこれ」
そう言って、風香は咲にその本を渡した。タイトルは、横笛戦闘術と古臭い字で書かれていた。これを読めば自分も何かの役に立てるだろうか。
「ありがとう」
うれしくてつい、笑みを送る。
「いや、そんなのいいよ全然」
「どこで見つけたの？」
「図書室だけど。なんかさ、バイオリンとかトランペットとかいろいろあってさ」
「いっぱいあるんだ。ほんとありがとう。あたし、ピアノしか弾けないからさ」
風香はじゃあ、と言って部屋を去って行った。とりあえず、１ページ、２ページとめくってみる。そして、基本と書かれたページを見つける。そこに書いてある通りに、指を穴に充てて息を吹き込んだ。すると、咲のそばに大きな光が現れる。その光は、大音階と書かれていた。では、小音階もあるのだろうか。とりあえず、大音階の操作方法を読み始めた。
その頃、絆は知３９階娯楽室でババ抜きをしていた。隣では一輝がライフル射撃で遊んでいた。
「はい、俺の勝ち」
そう言って絆はジョーカーのない残り手札２枚をテーブルにたたきつける。
「うわー。また負けた。やっぱり、運かな」
「知、顔でわかるんだよ」
「よく言われる。ヘリの操縦の時は、顔が見られないから攻撃よく避けられないけど」
「常にポーカーフェイスで生きてかないと死ぬよ」
ちなみに、絆はポーカーフェイスである。だから彼は極端にこうい

うゲームが得意である。負けたことはあまりない。しかし、唯一負けた相手が咲良だった。彼女はのんきな性格で、絆は逆に顔が読めなくなり、負けることがある。結局、咲良が一番強いのであった。まあ、本人がいないので、ここでは彼が一番だが。その頃、一輝はライフルの弾丸を的の１０点の処に充てていた。そして、口笛を吹く。

しばらくしてから、ジーニアスの放送が入る。

「諸君、任務だ。今回の任務は二人一組で、調査に入ってもらう。道がよくわからなくなる仕掛けなんだが、やたらと複雑になってしまってね。では、メンバーを発表しよう」

自分たちで決めれないことが悔しかった。

「まずは、古城君と波村さん」

絆はげっ、と思わず口に出る。咲は練習に集中していて、放送が聞こえてなかった。

「空君と内野さん。斧好君と篠宮さん。日溜さんと沢良宜君。寺和君と倉谷さん。天の川君と高原さん。以上だ」

それから、ジーニアスの声は途切れた。３０分後にロビーに全員が集まる。自動ドアの前にはもうヘリが来ていた。まるで、嫌いな人と早くペアになれと、ジーニアスの代わりに言っているみたいだ。とりあえず、絆は咲を探した。

「波村」呼びながら近づいていく。「わかってると思うけどさ。お前と行動しなくちゃならないっていうか」

咲は何も言わなかった。もしかして、何も聞いてないのだろうか。顔が固まっている。絆は返す言葉がなくなった。

「えっ、それ本当」

「あのジーニアスとか言う奴が言ってたじゃんか。聞いてなかったのかよ」

「・・・ガーン」

彼女は明らか不満そうな顔だった。聞かなくてもわかる。だって、お互い嫌いだから。心の中で彼女への思考を再確認する。俺は波村

が嫌いだ。まあ、予想通りの答えだったのでそこまで気にしなかった。
全員がヘリに乗ると、ゆっくりとプロペラを回転させて浮上し始めた。ヘリの中では、たまたまだがペア同士が近くにいた。背後には咲がいる。笑い声がうるさい。そう言えば、彼女の声は久しぶりに聞いた気もする。１００日ぶりぐらいだろうか。そこまで自分たちは仲が良くない。簡単に言うと、眼中にないのであろう。そんなことを考えていると、今回の任務のエリアが見えてきた。今日はどんな仕掛けがあるのだろう。本来、ここはゲームの中なので、絆はいつもゲーム感覚で敵を倒していた。今回のボスが、驚異的な攻撃を持っていることも知らず、今日も絆はコントローラーを操るように敵を倒すのだろう。

着いたのは、古ぼけた無人の町並みだった。よくあるダークタウンってやつ。ゲームだとここらへんでヤバいことが起きやすい。
皆がヘリから降りた。そして、辺りを見渡す。そこにあったのはちょうど今回発表されたペア１２と同じ数、１２本に分かれた道だった。この風景少し出来すぎてないかと思う。他に感じたことは、これは道に迷わせるパターンのダンジョンではないか。考え事をして、ボーっとしていると、咲が服の裾を引っ張っていた。
「古城！」
少しキレ気味の声を聞いて我に返る。
「あぁ、ごめん。どれ行く？」
「どこでもいいから、早くしてくれない」
「わかったって」
何人かはもう行ってしまったようだ。適当に道を選んで進み始める。咲も後ろからついてくる。
「お前、フルート出来るようになった？っていうか、そんな楽器なんかでどうやって戦うんだよ」
「風ちゃんが横笛戦闘術って本くれてさ。それ読んでたら、なんか

大音階とかなんかもう、ほんと凄くて」
なんかわからない。そう言ってやりたかった。しかし、めんどくさいので言わない。
「古城って、めんどくさがりだよね」
「急になんだよ」
いきなり話を変えておいて、しかも自分の事を言ってくるとは思わなかった。返す言葉がない。めんどくさいとか、心の中を読まれているのかと驚く。
「あんたって無意識に袖をくいって上げる癖ない？」
「それは自分でも気づいてるけど。まあ、よく言われる」
どこに注目してるんだよ。こんな性格だったっけ。ちゃんと話したことないから咲の性格など知るわけがないか。だけど、なんでこんなに古城絆のことを知っているのだろうか。自分はそんなに極端な人間だっただろうか。他の女子、日溜や倉谷にもばれているのだろうか。そう言えば、篠宮にそのにょきって手が出てくる動作なんなのって言われたことがあるのを思い出す。
「波村だって、よく最低、とかも～とかめっちゃわかりやすい口癖あるじゃんか」
「それはっ、・・・。知りませんでした」
素直に謝る。今、眼鏡がずれ落ちそうになっていた。一度は彼女の素顔を見てみたいものだ。
「ねえ、眼鏡取ってよ」
「嫌だから。ふざけないでよ」
即答だった。なんでそんなに怒るのだろうか。
「・・・。古城はさ、あたしがピンチの時。助けてくれる？」
「だから、急にそんなことなんで聞くの」
「一応、あたしだって。死にたく、ないから。古城だってそうでしょ」
今の言葉を聞いて港中を全滅させた日を思い出す。咲の言葉は一つ一つが心に訴えかけているみたいで、重い。だからよく返す言葉に

詰まる。これが平和主義の考えか。意外と素晴らしいものだ。
「死ぬときって、どんな感じなのかな」
今度はこちらから咲に問う。
「それは、人にもよると思うけど。とりあえず、怖いとかそんな感じかな」
死んだことあるようなセリフだった。まあ、それはないか。ちょっと大袈裟に言いすぎた。本人には聞こえてないからいいとしよう。
しばらくすると、巨大なメカが現れる。凄く大きかった。
「一人で大丈夫？」
「何言ってるの。手伝ってよ」
トンファを取り出す。彼女はフルートを。絆がメカアーマーに向かって走り出すと同時に、彼女も笛を吹き始める。跳びあがった際には、彼の耳元にも音色が聞こえる。トンファをぶつけようとした時だ。巨大な光がメカアーマーの腕を貫き、破壊する。ちょっと待てよ。そのまま、トンファをぶつけると、同じく相手の腕が落ちる。ミサイルでも打とうとしたのだろうか。これでもう攻撃はされにくい。着地と同時に、大音階がメカアーマーの胸部を貫き、一瞬にして倒した。まさか。もう少し時間がかかると思った。彼女がこんなに強いなんて。まるで、絆の女バージョンじゃないか。予想外の事が起きた。
「ねえ、あんたなんかした？」
「お前が、やりすぎなんだよ」
「あたしもあそこまで威力あるなんて知らなかったし。っいうか初めて戦ったんだよ」
「へえ」
棒読みで真顔の一言にはむかついた。
その頃、翔平弘美ペアと知聡美ペアはと言うと、一言で言うボスにたどり着いていた。どうやらはずれくじを引いたのは彼らだったらしい。
「おい、ブー子。少し、下がれ。お前の風は便利だけど、威力が低

い」翔平の声が飛ぶ。
ちなみにブー子は聡美のことだ。彼女は少し太り気味だからだ。
「はいはい」
素直に彼女は後退していく。
「そんな長い言葉喋る暇あったら、攻撃してよ」
背後から、巨大メカアーマーに三節棍をぶつけていた。知も2丁のマグナムを打ちまくる。しかし、あまり攻撃が通じている感じがしない。せめて、急所にでも当てることが出来たら。
　巨大メカアーマーが翔平と弘美のほうを向く。そして、頭を180度回転させる。それは巨大なキャノン砲だった。見るからに威力がでかそうだ。相手がチャージを開始する。それを察知した翔平は
「日溜避けろ」
二人はその場から逃げたが、キャノン砲の向きは変わらず、チャージも中断されなかった。結構不便なんだな。そして、極太のレーザーが放出される。そのレーザーは、翔平たちがいたコロッセオの一部を消し飛ばした。跡形もない。
「ヤバい、なんだよあいつ」
しかし、弘美と翔平が巨大な腕に掴まれ、壁に投げつけられる。
「ぐはっ」
二人が壁から落ちると、相手はまたチャージを開始する。弘美と翔平は思ったよりダメージが大きく、やっとの思いで立ち上がった。しかし、もう既にイレイス弾のチャージは完了されていた。そして今、レーザーが発射される直前。聡美が弘美を、知が翔平を突き飛ばす。まさかだった。地面にたたきつけられると同時に、イレイス弾が聡美と知を焼き尽くす。
「知ぉぉぉっ！」
「聡美ーーー」
レーザーが消えた後には知も聡美の姿もなかった。先ほどと同じ状況になっていた。
「嘘だろ」

「聡美ちゃん」
その時だ。兼史朗や一輝。咲良が上空から跳び下りてきて、巨大メカアーマーの頭部を破壊する。ガラスなどがたくさん飛び散る。巨大メカアーマーは機能を停止した。コクピットからは人間が出てくる。そいつは逃げ出したが、観戦席にいた沙絢が弓で射殺した。

少し前の時間、弘明と風香は巨大メカドラゴンと戦っていた。周期的に打ってくるレーザーはとても威力があり、色んな方向から飛んでくるので、回避するのに手間取っていた。
「なんだよあいつ。強すぎるって。まじピンチ」
「とりあえずあの小さいほうのやつ破壊しない？」
風香が言っているのはドラゴンの後頭部から出ている。首と頭だけのドラゴンのことだった。そのドラゴンは全部で８匹。そのため、運が悪かったら８本同時にレーザーが飛んでくることになる。
絆がジャッジメントスマッシュを放ち、１匹を破壊する。
「少しは楽になっただろ」
「ナイス！」
と言っても、弘明は近距離型の武器なので攻撃が当てれず苦戦していた。風香は鞭を伸ばせば届くし、咲はもとから遠距離攻撃だ。少し羨ましかった。
咲の大音階がドラゴン本体に一撃を決める。それに気付いたメカドラゴンは咲にレーザーを放つ。それを見た絆が咲に向かって走り出し抱きかかえ、レーザーを回避する。
咲は驚いて絆を見つめていた。
「ちょっと何。セクハラ！」
「ピンチの時助けてって言ったのお前だろ」
「古城。・・・もう、変態なんだから」
「はあ、助けてやったこと感謝しろよ」
その時だった。イレイス弾が飛んでくる。風香や弘明は何とか避ける。絆は咲を抱きかかえたまま、転がる。しかし、風の衝撃で。

唇が触れ合う。
「うっ、お前」
汚いものに触れたからぺっと口から唾を吐く。菌を取った。
「何が？」
「気付いてないならいいよ」
これこそセクハラと言われる。一度咲と呼びたくなる。
イレイス弾でメカドラゴンがけし飛ぶ。何が起こったかわからなかったが、手間が省けた。本当はそうでもないに。
「なんだったんだ」
「あっ、弘美ちゃんとかいる」
しかし、翔平や弘美は膝をついて絶望に浸っていた。４人はコロッセオへと走っていく。沢良宜と言って彼らに近づいていく。
周りを見渡すと、兼史朗。一輝、咲良。８人。二人足りない。・・・知と聡美。
「ブー子と知は」
「聞くな」
兼史朗が肩を叩いた。何があったんだ。全く状況が読めない。前を見ると、キャノン砲を背負った巨大メカアーマーが壊れて無残に焼け残っていた。あれが先ほどのイレイス弾を放ったのだろう。そう考えると、まさか。２人は死んだのか。
「わかった」

空を見上げると、もう迎えのヘリが来ていた。

５章　大魔神の叫び

任務が終わって、絆は自分の部屋にいた。ベッドはふかふかしている。自分の家もこんな感じだったはず。急に過去が恋しくなる。家族は今、どうしているだろうか。すると、咲が入ってくる。
「うおっ、びっくりした。なんだよ」
「いや、なんとなく。沙絢ちゃんから聞いたんだけどさ、さっきの

任務のことなんだけど」
すぐ分かった。気まずいので聞く気がない。
「いいよ、話さなくて。聞きたくない。・・・知」
一瞬にして、家族より知のほうが恋しくなる。彼はもう帰ってこないのか。彼の家族にはどう言えばいいのだ。なぜ、自分で責任を背負っているのだ。深く考えることは、ないのだ。
「もう終わったことだから、いいか」
「そんなあっさり終わらせたら駄目だよ。あんたたち結構仲良かったのに。寂しくないの」
「わかってるよ。誰かが死ぬってわかってた。けど、こんなことしたって、・・・死が早まっただけで。俺はどうせ何も助けてもやれなくて。そうして、俺もいつかここで死んでさ。みんな、死ぬのかな」
最初の言葉が心に強く残った。絆がこんなことを言ったのは正直意外だった。今まで、やせ我慢とかカッコつけて、強がってたのかな。そう思うと、絆も人らしい一面があるんだなと思う。
「でもさ、あたし。さっき古城に助けてもらってうれしかったよ。さっきはありがと」
「波村」
「あっ、あとさ。あんた、キスしたでしょ。あの時」
「いや。してないよ」

兼史朗は図書室で武器など、戦闘に関係する本を読んでいた。
「アムドレイバル・・・カルミレイテ・・・ア」
そこに書いてある呪文らしきものを読んでみる。すると、一つの光が兼史朗の体内に入り込む。別に、痛みも感じず、異常はなかった。また本の文章に眼を通す。そこにはこう書かれていた。
＜この呪文唱えし者　魔人の力身につけたり　お主が願えば、魔人が出現しどんな災難でも打ち破り、平和をもたらす力となるであろう　しかし、代償として願いし者死すべからず＞

「死ぬんだ。まあいいや。使わなければいいことだし」
本当は強すぎる力が手に入って満足していた。これでみんなを助けれるならそれでいい。しかし、本当にこの力を使うと、自分は死んでしまうのだろうか。両刃の剣だった。とりあえず、今は使うわけがないので考えないことにした。・・・使うと、死ぬ。しかし、本の文章が頭に残っていた。次に死ぬのは、もしかして、自分ではないのだろうか。

夕食の時だ。弘明はいつも通り、風香と同じ席に座る。１００席近く席があり、彼女が先にレストランへ行き、その上彼女は毎回座る場所を変えるので探すのがめんどくさい。
「あのさ、これからいつも同じ席で食べてくれない？」
「じゃあ、一緒に座らなければいいじゃん」
「いや、そういう問題じゃなくて」
「古城とか一人で食べてるよ。少しは見習いなさい」
まるで、母親のような言い方だった。なぜそう上から目線でしか喋れないのだ。めんどくさい女だ。きっと、絆も同じことを言うだろう。
「じゃあいいよ」
そう言って、弘明は席を立つ。どこに座るのかと思えば、絆の隣だった。かわいくない奴。すると、代わりに咲がやってくる。
「隣、いい？」
「ああ、全然いいよ」
やはり聡美がいなくなったのは咲にとって影響が大きいようだ。少しでも、彼女に優しく接してあげないと、下手すると彼女が一人になってしまう可能性が高い。風香は最近、咲と絆が良く喋るのも知らず、そう思っていた。
隣に座った割には大した会話もない夕食の時間だった。なんとなく寂しい。自分にも何かしてあげれないだろうか。どちらかというと、絆のほうに役に立ちたかった。もしかして、自分は。それはな

いか。変なことを妄想していたようだ。そういえば、彼とはＴＨＥＷＯＲＬＤの話を聞いて以来喋っていない。罰ゲームで告白されたことがあるから話しかけづらい。いや、気まずいと言ったほうが適しているだろう。

夜、風香は絆の部屋に行く。ドアを開けると、絆は自分を見るなり、ため息をつく。

「来ないほうが、良かったかな」

「いや、そうじゃなくて。なんで、二日連続で女が部屋に入ってくるんだろうと思っただけ」

「昨日は誰が」

「波村だよ。めちゃくちゃ緊張した。何されるかわかんねえもん」

咲は絆のこと嫌いだった気がする。まあいい。

「今日は何の用？」

「いや、ただ古城と話がしたいだけ」

「俺なんかと何話すの？」

「その、古城はあたしに告ったことあるでしょ。あの時、あたしの事どう思ってたのかなって思って」

「ああ、あの時。好きだったよ。今は違うけどね」

「えっ、ちょっと今の。本当に言って良かったことなの。なんかあっさり言っちゃったけど」

「もう終わったことだし、いいんだよ」

風香は絆に疑問が浮かんだ。結局、彼女は「好きだった」というセリフのせいで眠れなかったらしい。

1　theworld（後書き）

生きることに悩む中学生たちの物語です。次回作にも期待してください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1584z/

未来物語

2011年12月5日18時58分発行